

＜研究成果の紹介＞

斑点米の被害は出穂期の遅れが5日以内であれば増加しない

農業研究部 循環機能開発研究課

1. 成果の内容

生産者及び消費者の有機米に対する関心は、非常に高くなってきています。農業研究部では、有機米生産に対応可能な栽培技術開発のプロジェクト研究を実施してきました。ここでは、近年多発傾向であり、品質への影響が大きい斑点米カメムシ類に関する成果の一部を紹介します。

有機栽培に適した水稻品種は、有機質肥料による栽培管理等の点から、本県主要品種であるコシヒカリより熟期（出穂期）が遅いものが想定されます。このため、三重県のようにコシヒカリが栽培面積の大半を占める状況下で、熟期が遅い有機米が栽培されると、その圃場では周囲とは異なる害虫発生様相となることが考えられます。特に、斑点米カメムシ類が熟期の遅い水稻を集中的に加害し、被害の発生が懸念されます。そこで、標準的なコシヒカリに比べて出穂期が遅れる水稻におけるカメムシ類による斑点米発生程度の違いを検討しました。

標準的な時期に作付けたコシヒカリの圃場中央部に、播種及び移植時期を遅らせることによって出穂期を調整したコシヒカリを栽培する区を設定しました。2001年の試験では、

出穂期の遅れが10日、13日、19日及び26日となりました。カメムシ類の加害による斑点米の割合（斑点米率）は、出穂期を遅らせた全ての区で標準区を上回り、出穂期が遅いほど高まる傾向が認められました（図1）。2002年の試験では、出穂期の遅れが3日、5日及び9日となりました。斑点米率は3日及び5日後出穂区では標準区と同等でしたが、9日後出穂区では高くなりました（図2）。

以上のことから、周辺の圃場に比べて出穂期の遅れが5日程度の水稻であれば、カメムシ類による斑点米被害は増加しないと考えられました。

2. 技術の適用効果と適用範囲

周辺圃場との関係から水稻の品種を選定したり、作付け時期を決定するにあたり、斑点米カメムシ類による被害を回避するための参考となります。

3. 普及・利用上の問題点

今回の試験では三重県で主に問題となる斑点米カメムシ類であるクモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、シラホシカメムシ類がほとんどでした。他のカメムシ種が優占する場合については、改めて検討が必要です。

（北上 達）

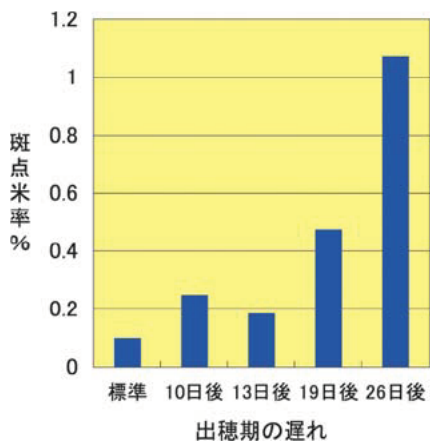


図1. 出穂期が遅れた水稻におけるカメムシ類による斑点米の被害（2001年）
1区3.6㎡、3反復の平均値。

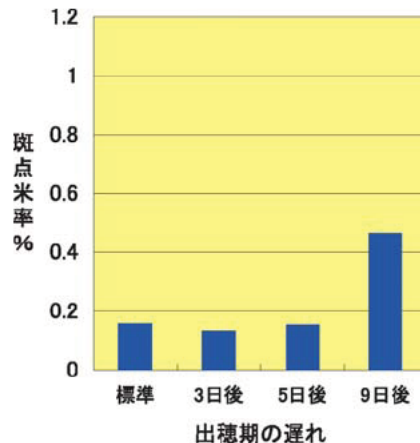


図2. 出穂期が遅れた水稻におけるカメムシ類による斑点米の被害（2002年）
1区3.6㎡、3反復の平均値。